

【研究ノート】

ポセイディッポス『エピグラム集』19ABと20ABの解釈 とLithikaにおける位置づけ^{*1}

千葉槇太郎

本稿において述べるのは、マケドニアのペラ出身でおよそ前3世紀頃のヘレニズム時代の詩人ポセイディッポスの作とされるパピルス(P.Mil.Vogl.VIII 309)の形で近年発見された『エピグラム集』の19ABと20ABについてである。この19ABと20ABのエピグラムはLithikaと称される『エピグラム集』のセクションの中でも少々変わっているとされる詩である。その理由として挙げられることは、18ABまでの詩では主に宝石に関して扱っていたのに対して、19ABになると突然岩にそのテーマが移行し、ポセイドーンへの讃歌のようにになっていること^{*2}、そして20ABに至っては石に関係する言葉そのものが出てこないことである。以上の点を踏まえて本稿では19ABと20ABに関しての解釈と読みを検討し、Lithikaのセクションにおける位置づけも検討しつつ、筆者なりの見解を示すことをその目的とする。

^{*1} 本稿の執筆にあたっては匿名の2名の査読者の方々から数々の有益な意見をいただいた。ここに御礼を申し上げたい。無論それでも残る不備や誤りは筆者の責任である。

^{*2} Kuttner, 2005, p.146では19ABと20ABをpseudo-hymns、Hunter, 2004, p.95では20ABをclose hymnsと表現している。

Posidippus 19AB

III 28	συλ]λόγισαι μεγάλην τ[αύτη]ν πόσα κύμα[τα λᾶαν	1
29	τη]λοῦ μαινομένης ἐξ[εφόρης]εν ἄλόσ·	2
30	τή]νδε Ποσειδάων βρια [ρῶς ἐδ]όνει καὶ ἀπ[οκλάσ	3
31 •	ρίμφ]α ἐφ' ἑνὸς κκληροῦ κ[ύματο]ς ἐξέ βαλεν	4
32	ἡμι]πλεθραίν ὄσας προ[τὶ τ]ᾶ[ς]τεα πέτρην,	5
33	τοῦ Πολυφημίου σκαιτέρη]ν θυρεοῦ·	6
34	οὐκ ἄν] μιν Πολύφημος ἐβάστασε σὺν Γαλατεία	7
35	πυκνὰ κολυμβήσας αἰπολικὸς δύσερωσ·	8
36	οὐδ' Ἀνταίου] ὁ γυρὸς ὀλοίτρ<ο>χος, ἀλλὰ τριαίνης	9
37	τοῦτο Καφηρεῖς τε<ι>ρακ<τ>οεργὸν ἄλόσ·	10
38	ἴσχε, Ποσειδάων, μεγάλην χέρα καὶ βαρὺ κύμα	11
39	ἐκ πόντου ψιλὴν μὴ φέρ' ἐπ' ἡϊόνα·	12
40	τετρακαμεικοσίπηχυν ὄτ' ἐ<κ> βυθοῦ ἦραο λᾶαν,	13
41 •	___ ῥεῖα καταμήσεις εἰν ἀλί νῆσον ὄλην.	14

III 28-41 et IV 1-6 in unum coniungere malunt Ferrari 2008, Gasser 2015 28 μεταλαν P: μὴ] λόγισαι με<γ>άλη]ν τ[αύτη]ν πόσα κύμα[τα λᾶαν (vel πέτρην) ed. pr., min. (def. Gasser 2015) : μὴ] λόγισαί με, τάλαν Lapini 2002, Livrea 2002 (def. Ferrari 2008) : συλ]λογισαί<ο> μέ<γ>' ἄν Luppe 2002b : συλ]λόγισαί με ταλαντ[ισαί]ο]ν πόσα κύμα[τα λᾶαν Lapini 2007 : τ[όσση]ν Livrea 2002 : τ[οῦτον] et πέτρον Luppe 2002b 29 ἐξ[εφόρης]εν ed. pr., min. (def. Lapini 2002, Luppe 2002b) : ἐξ[εκύλις]εν Austin 2001a (def. Gasser 2015) : ἐξ[εκύλι]εν Livrea 2002 30 τή]νδε ed. pr., min. (def. Gasser 2015) : τό]νδε Luppe 2002b βρια[ρῶς Austin 2001a, ed. pr., min. (def. Gasser 2015) : βρια[ρήν] Lapini 2007 ἐδ]όνει ed. pr., min. (def. Gasser 2015) ἀπ[οκλάσ ed. pr., min. (def. Gasser 2015) : ἀπ[ώσας Luppe 2002b : ἀπ[ωθεν] vel ἀπ[οπρό Austin 2001a : ἀπ[έκλα Gärtner 2006 31 ...]αεφενοσ P : ῥίμφ]α ed. pr., min. (def. Di Benedetto

2003) : ὄφρα vel μέσφα? Gärtner 2006 : κοῦφα De Stefani 2003 : αἶψα
 Magnelli 2004 : ῥεῖα Lapini 2007 32 ὥσας προ[τὶ τ]᾿[c]τεα Austin
 2001a, ed. pr., min. (def. Gasser 2015) : ὥσας προ[τὶ c ἀν]᾿[v]τεα Lapini
 2002 (def. Gärtner 2006) : ὥς ἄσπρι[v ἀν]᾿[v]τεα Luppe 2002b πετρην P
 : πέτρων Luppe 2002b 33 Κυκλωπείου Gärtner 2006 (v. Schröder 2008)
 σκαιοτέρην θυρεοῦ ed. pr., min. (et Luppe 2002b) : σκαιοτερονθυρεου
 P : σκαιότερον θυρεόν Lapini 2002 34 αμμιν P 36 Ἄνταιού ὁ
 γυρὸς ὀλοίτροχος ed. pr., min., Lapini 2002 : ανταιουγυροσολοιτριχος P :
 Ἄνταιού γυρὸς ὀλοίτροχος Führer ap. Bernsdorff 2002 (def. Gärtner 2006)
 : ἀνταῖος ὁ Livrea 2002 : ἀκταῖος ὁ Lapini 2003b <Ἄ>ανταιος ὁ Tsagalis
 2013 : Αἰτναῖος ὁ Obbink 2002 (def. Ferrari 2008) 37 τερραγοεργον P :
 τ' ἄγριον (vel θ' ἱερὸν) ἔργον Lapini 2007 : τ' ἄκρατον ἔργον Ferrari 2008
 (τριαίνης ... Καφρηίης τειρατοεργόν) ἄγος Gärtner 2006 (v. Schröder
 2008) 40 ὄτ' ed. pr., min. : ὄς Casanova 2002 (def. Ferrari 2008,
 Tammaro 2010) εγβυθου P 41 καταμήσεις ed. pr., min. : καταμήσας
 Tammaro 2010

どれほど多くの波が、遠くの怒れる海から

それほどの巨大な岩を運んできたのかを考えてみよ。

ポセイドーンが激しく掻き立て

一つの厳しい波の上に軽々と放り投げた、

半プレトロンの岩を町に向けて、

それはポリュペーモスの扉石よりも不吉であった。

ポリュペーモスはそれを持ち上げることができなかった、

ガラティアと一緒によく素潜りをした恋に狂った山羊使いは。

アンタイオスの岩のように丸い肩ではなく、

その驚くべき仕事はカバレウスの海の三叉鉾の仕業であった。

強大な手を抑えよ、ポセイドーンよ、そして重い波を

海からむき出しの浜辺へと追い立てないように。

深さにして 24 ペーキュスもの岩をあなたは持ち上げたので、

海の中の島全体を容易にあなたはえぐり取ってしまうだろう。^{*3}

^{*3} テキストは以下のオンライン上のものを使用している。ただしパピルス上欠損がみられる箇所では筆者による補いを加えている。そのため app.crit. にも変更を施している箇所がある。このテキストは幾人かの研究グループによるもので、定期的な

1-4 行目 行頭の欠落部分に $\mu\eta$ と補ったのは Austin であるが、概ね校訂者たちに受け入れられている読みである。それではこの読みは果たして正しいのであろうか。この読みを取らない研究者は多くないため $\mu\eta$ 以外の読みの可能性についての議論がそれほど尽くされているとは言えないと考えられる。ポセイディッポスが詩の冒頭で $\mu\eta$ を用いているのは一度だけである (A.P. 5.186.1)。一方で 17AB、18AB で用いているのは普通の命令法である。また、平叙文の形で冒頭に $\omicron\upsilon$ や $\omicron\upsilon\tau\epsilon$ を好んで用いるという傾向もある。他に提案されている読みの可能性としては $\sigma\upsilon\lambda\lambda\omicron\gamma\iota\sigma\alpha\iota$ がある。 $\sigma\upsilon\lambda\lambda\omicron\gamma\iota\sigma\alpha\iota$ の読みを取っているのは Luppe と Lapini である。冒頭 1 行目の $\lambda\omicron\gamma\iota\sigma\alpha\iota$ からパピルスでは $\mu\epsilon\tau\alpha\lambda\alpha\nu$ と読める箇所の修正案として Luppe は $\sigma\upsilon\lambda\lambda\omicron\gamma\iota\sigma\alpha\iota\kappa\omicron\ \mu\acute{\epsilon}\gamma' \alpha\lambda \acute{\alpha}\nu$ を提案しており*4、Lapini の案は $\sigma\upsilon\lambda\lambda\omicron\gamma\iota\sigma\alpha\iota \mu\epsilon \tau\alpha\lambda\alpha\nu\tau\alpha\iota\omicron\upsilon\nu$ である*5。Luppe のように可能性の希求法にしてしまうよりは、17AB ($\sigma\kappa\acute{\epsilon}\psi\alpha\iota$)、18AB ($\acute{\alpha}\nu\alpha\kappa\lambda\acute{\iota}\nu\theta\eta\tau\epsilon$) に見られるように命令法にするのがパピルスの読みのままであるし、ポセイディッポスの詩の形式に則っていると思われる。Lapini の $\tau\alpha\lambda\alpha\nu\tau\alpha\iota\omicron\upsilon\nu$ 「1 タラントンの重さの」は注目すべき直しである。Lapini 自身もまた LSJ でも類例として引いているのは投石器が投げる石の重さを表す言葉である。Lapini は攻城戦の文脈でなければ

アップデートされているものである。Francesca Angi, Martine Cuypers, Benjamin Acosta-Hughes, Elizabeth Kosmetatou (edited and periodically updated), *New Poems Attributed to Posidippus: An Electronic Text-in progress*, Version 13 January 2016 The Center for Hellenic Studies / Classics@ Vol. 1: Posidippus [https://chs.harvard.edu/CHS/article/displayPdf/3059\(2018/2/28\)](https://chs.harvard.edu/CHS/article/displayPdf/3059(2018/2/28)) 時点で有効)。なお、テキストの左側に付されているローマ数字とアラビア数字は、それぞれパピルスの葉と行数を示している (例えば H39 ならパピルスの 2 葉目の 39 行となる)。右側はエピグラムの行数を示している。また、テキストに付されている日本語訳はすべて筆者によるものである。また、本稿で示される行数はパピルスの行数ではなくエピグラム自体の詩行の行数で示している。

*4 Luppe, 2002, pp.135-136.

*5 Lapini, 2007, p.4.

単に「重い」という意味になるとしている*6。ここでは文意として岩の大きさかあるいは重さのどちらを言おうとしているのかが問題になる。ἤμιπλεθραίνη や τετρακαιεικοσίπηχον という単語が示しているのはあくまで大きさである。そこで μεγάλην τ[αύτη]ν という直しがここでふさわしいであろう。

そもそも「波の数を数えるな」という読みを採用した場合どのような意味になるであろうか。注釈者の説明では4行目の「一つの波」に注目し、ポセイドーンに必要なのは一つの波だけであり、いくつも必要なわけではないとする。そこで数える必要がないというわけである*7。また、テオクリトスも言及しているが、波を数える行為は徒労のことわざ的な言い回しだと指摘されている*8。ただ、ここでは συλλόγισται として「考えてみよ」の意味にするのが良いのではないかと筆者は考える。ここで意味されていることはポセイドーンがいかに強大な力を持っているかである。つまり、ポセイドーンが巨大な岩を海に放り投げた結果、海が波立ったその力を見よと言ってるのではないかと思われる。主に散文で使われる動詞であり、韻文での使用例は見られないものの、意味の点から考えて συλλόγισται とするのがよいであろう。

2 行目 パピルスにおいて空白となっている箇所は ἐξ[εφόρης]εν かもしくは ἐξ[εκύλις]εν という直しが提案されている。Wasser が主張するところでは ἐξέβαλεν のようなダイナミックな動詞とは対照的なものとして ἐξ[εκύλις]εν を取る。また、7AB と 16AB で用いられていることも根拠として挙げている。筆者としてはそこまで厳密な対照を見ずとも、波が岩を運んだという文意を考え、ἐξ[εφόρης]εν を取る。

3 行目 叙事詩で用いられる Ποσειδάων という形が用いられている。

5 行目 ἤμιπλεθραίνη この形容詞形は合成語でなくとも hapax lego-

*6 Lapini, 2007, pp.4-5.

*7 BG, p.130.

*8 Hunter, 2004, p.100, Gow, 1952 vol.2, p.317(Theoc.16.60 への注).

menon である。通常の形容詞形は *πλεθραῖος* である。1 プレトロンはおよそ 30m であるので、半プレトロンでは 15m である。古文書学的には *τριπλεθραῖν* (90m) も可能ではあるが、そうすると 13 行目の *τετρακαεικοσίπηχυν* のおよそ 11m とかなり乖離してしまうため *ἡμιπλεθραῖν* が適当であろう*9。

6 行目 巨人のポリュペーモスはポセイドーンの息子でもある。その話は『オデュッセイア』9 巻において登場していて、このエピグラムも着想はそこから得ているはずである。ポリュペーモスはオデュッセウスが船で逃げる際に、山をちぎって投げたり岩を放り投げたりするほどの怪力の持ち主である。その力をもってしてもポセイドーンが持ち上げた岩は動かすことはできなかったことが含意されている。ここではポセイドーン＝海と解するべきであり、いくら力のある巨人でも自然の力にはかなわないとする説明も可能であろう。

7-8 行目 ポリュペーモスが恋に狂う話はもっと後代になってからの話で、ピロクセノスによるディテュランボスにおいてが初出とされる*10。そして、牧歌などにも題材として取り上げられている*11。テオクリトスにおいてガラティアとのかなわない恋に傷心のポリュペーモスは自分自身で歌に解決を見出す。おそらくこのテオクリトスの詩に反応したものがカッリマコス *A.P.12.150* である (*ὡς ἀγαθὸν Πολύφαμος ἀνεύρατο τὰν ἐπαιδᾶν / τῶραμένῳ· ναὶ Γᾶν, οὐκ ἀμαθῆς ὁ Κύκλωψ...* 「なんとポリュペーモスは恋する者にとって良い薬を見つけたことか、／ガイアにかけてキュクロープスは愚かではなかった。」)*12。

8 行目の *αἰπολικὸς δύσερος* という表現は直接的にテオクリトスの詩句を思い起こさせるものである (*Theoc. 6.6-7 βάλλει τοι, Πολύφαμε, τὸ*

*9 Gasser, 2015, S.100.

*10 最近のものでは LeVen, 2014, p.224 を参照。

*11 *Theoc. 6.11*. 詳細は Petrain, 2003 を参照。

*12 Petrain, 2003, p.363.

ποιμνιον ἅ Γαλάτεια/ μάλοιςιν, δυσέρωτα καὶ αἰπόλον ἄνδρα καλεῦσα. 「ポリュペーモスよ、ガラテイアが君の羊の群れにリンゴを投げて、恋に疎い山羊飼いだと呼んでいる。」)。一方で、テオクリトスとポセイディッポスの詩ではポリュペーモスとガラテイアとの関係性に違いを見出すこともできる。テオクリトスでは片方がもう片方と親しくなろうとするのだが、すれ違ってそれが果たされない。一方でポセイディッポスでは二人で共に素潜りをするなど、その関係性は対照的に描かれている。

9 行目 Ἀνταίου ὁ γυρὸς ὀλοίτροχος 「アンタイオスの岩のように丸い肩」。もともとパピルスに見える文字列は ἀνταιογυροκολοιτριχος である。テキストの読みは修正後のものである。そのまま読めば「アンタイオスの岩」という意味だが、アンタイオスの岩が何であるのかがそのままでは不明瞭である。アンタイオスと岩に関する神話は知られうる限りではない。有名な神話はアンタイオスが道行く者にレスリング勝負を仕掛けては殺していたが、最終的にはヘラクレースに投げられて殺されたというものである。しかし、アンタイオスもまたポリュペーモスと同じようにポセイドーンの子である。テオクリトス『牧歌』22.48-50 (ἐν δὲ μύεσ στερεοῖσι βραχίσιον ἄκρον ὑπ' ὤμων / ἔστασαν ἤνυτε πέτροι ὀλοίτροχοι οὔτε κυλίνδων / χεϊμάρρους ποταμὸς μεγάλας περιέξεσε δίνας 「頂点となる肩の下の硬い腕には、雪解け水の川が大渦でもって転がし磨いた丸い岩のように筋肉がついている。」) ではアミュコスが岩のようであると丁寧の説明されており、ここでは理解しやすいものになっている。注目すべき点としてはアミュコスもまたポセイドーンの子であり、旅人に対して勝負を挑んでいたことはアンタイオスとの共通点を見ることができ。一方、ここにおいてはただ単に γυρὸς ὀλοίτροχος と書かれているだけであり、すぐに筋肉が岩のようになっていることの喩えであるとは判別できない。しかし、このテオクリトスの詩を知っていれば

「岩のような筋肉の付いた肩」と理解することはできよう^{*13}。他の読み替えの可能性としては Hunter が Obbink の οὐδ' Αἰτναῖος ὁ γυρός という読みの提案を示している^{*14}。このように読んだ場合は「それはエトナの岩ではなく」となり、ポリュペーモスの住むシケリア島への言及ともなる。また、Tsagalis はこの読みに対してかなり詳細な検討を行っている^{*15}。Tsagalis は <Αἷ>αντ{αι}<ος> という読みを提案している。その根拠として彼は『オデュッセイア』4.500-501 を引用し、ここでアイアースはポセイドーンによって割られたギュライの岩と共に死んでいったと言われている。Tsagalis が提案している読みにしても、類例として挙げている『オデュッセイア』のパッセージにしてもいかにも説得的に見えるが、問題なのは「アイアースの岩」とした場合のエピグラム中の文脈であろう。この行で言われているのは岩が海から運ばれてきたのは誰の仕業なのかということである。ポセイドーンの仕業であることはそのすぐ後で示されるが、その比較対象として言われるが明らかに力でも劣り、体格でも劣るような人間ではおかしいのではないだろうか。その前で言及されているのは巨人のポリュペーモスである。敵わないとはいえ、強大な力を持つポセイドーンと比較されるのならば、巨人のアンタイオスが拳がられている方がまだ文脈としてふさわしいと思われる。もう一つ Tsagalis がこだわっているのは、「カパレウスの海」のことである。Tsagalis は他の研究者の意見を退ける際にも、カパレウスの海に関しての説明が不十分だということをその理由にしているが^{*16}、ここでカパレウスの海という語が意味しているのは、単にカパレウスが海が荒れ

^{*13} Petrain, 2003, pp.365-373 に詳しい。

^{*14} 最初に言及されているのは Hunter, 2002 p.116 n.27 だが、のちに出た英語版の Hunter, 2004 p.101 n.34 でも同様の記述である。また、Ferrari, 2008, pp.101-102 も Obbink の読みを採用している。

^{*15} Tsagalis, 2013, p.240.

^{*16} Tsagalis, 2013, p.240.

る場所であることを示しているのにすぎないのではないだろうか*17。以上のように様々な修正読みはあるものの、それを検討した上でここでは元のパピルスを読みを尊重することとする。

11 行目 すでに指摘されているように βαρὺ κῦμα というのは変わった組み合わせではあるが、ホメーロスにおいては μέγα κῦμα (*Il.*15.381, 17.264, *Od.*3.296, 5.416, 12.60 etc.) という組み合わせと βαρεια χεῖρ (*Il.*1.89, 1.219, 5.81, *Od.*18.56 etc.) という組み合わせは見られる。ポセイディッポスはこの組み合わせを意図的に交換して注意を引くような文言にしていると考えられる*18。後代ではあるが他に Nonn.*D.*28.256 εὐνήσας βαρὺ κῦμα θυελλοτόκοιο θαλάσσης. という類例は見られる。

13 行目 τετρακαίκοσιπηχυν 「24 ペーキユスの」かなり長い合成語である。ホメーロスにおいて出てくる近い数としては δύο καὶ εἴκοσι である。合成語として登場するのも δυωκαίκοσιπηχυσ *Il.*15.678、δυωκαίκοσιμέτρος *Il.*23.264 と両方とも 22 という数字である。これはホメーロスの合成語から意図的にずらした数字を導入しているのかもしれない。

18AB から 20AB までの 3 つの詩には数字が多用されている。このある種の言葉遊びが連続している。この詩はホメーロスからの影響が特に色濃いものとなっていると言えよう。またそれと同時にテオクリトスの要素も取り入れている。それは明らかに意図的なものであり、ホメーロスとテオクリトスの言い回しをさかんに引用しつつ、ポセイディッポス独自の言い回しに言い換えている。Lithika のセクションの中においては 14 行と最長になっているのは大きい岩に関する詩であるからそれに応じて詩の方も長くなっていると考えられる。また変わった長い合成語を 2 つ使っていることもその大きさへの言及といえよう。言及される

*17 Gasser, 2015, S.103.

*18 Petrain, 2003, p.377 n.42.

人物もポセイドーンとその子のポリュペーモスとアンタイオスという強大な神と巨人である。全体を通して大きさということが強調されている詩である。

Posidippus 20AB

IV 1	ὥς πάλαι ὑψηλὴν Ἑλίκην ἐνὶ κύματι παίσας	1
2	πᾶσαν ἅμα κρημοῖς ἤγαγε<ς> εἰς ἄμαθον,	2
3	ὥς <κ'> [ἐ]π' Ἐλευσίνα πρηστήρ ἑκατό<γ>υος ἦρθες	3
4	εἰ μὴ Δημήτηρ σὴν ἐκύνησε χέρα·	4
5	νῦν δέ, Γεραῖσι τ' ἄναξ, νήφων μέτα τὴν Πτολεμαίου	5
6	ρκς γαῖαν ἀκινήτην ἔδωκε καὶ αἰγιαλοῦς.	6

III 28-41 et IV 1-6 (ep. 19 et 20) in unum coniungere malunt Austin 2001a, Lapini 2003b, Ferrari 2008, Gasser 2015 2 ηγαγεν P (def. Lapini 2003b, Livrea 2007) 3 ως τ' [ἐ]π' Ἐλευσίην ἄ<ν>, Austin 2001a (def. Lapini 2003b) εκατοργυος P (ἐκατόργυος def. Lapini 2003b, Livrea 2007, Ferrari 2008) ἦρθη Lapini 2003b 6 εσχε P

古くからあなたが高いヘリケーを一つの波で打ち

岸とともにすべて砂へと運んで行った。

そのようにエレウシスに 100 ギュエースの竜巻となり、あなたは

└巻き上げたであろう。

もし、デーメーテルがあなたの手にキスをしなかったならば。

今や、ゲライストスの主よ、プトレマイオスの

地と浜を動かさないままに抑えよ。

1 行目 ヘリケーはアカイアの町である。前 373 年に地震が起き、その際の津波でこの町は海中に沈んでいる。ヘリケーにはポセイドーンを祀った神殿もあった。元来ポセイドーンは海の神というよりも大地や地震の神であったとされる。

2 行目 Lithika という石がテーマになっているセクションの中にお

いて、石という単語が見つからないという意見^{*19}に対して ἄμαθον を石とすることは果たして可能であろうか。ある種の石は砂の一種であるという記述は見られる (τὰ δ' οἶον ἄμμου καθάπερ χρυσοκόλλα καὶ κύανος,...Thphr. *Lap.*40)。とほいうもののここでは砂を石の一種と考えているわけではないであろう。

4 行目 デーメーテルがポセイドーンの手にキスをするというのはどういう意味であるのか。Hunter はこのしぐさが普通ではないことを認めており、似たような場面として *Il.*24.478-479 のプリアモスがアキッレウスの手にキスをする箇所を挙げている^{*20}。現存するポセイディッポスの詩ではデーメーテルへの言及はこの箇所にしか見られない。デーメーテルとポセイドーンが関係する話としては牡馬と牝馬になったこの両者が交わるという話が残されている (Σ ad *Il.*23.347)。しかし、ここでのデーメーテルへの言及はポセイドーンとの関係においてなされたというよりは、アレクサンドリアにおけるデーメーテル崇拜との関係性でされているかもしれない^{*21}。荒れ狂う海をアレクサンドリアにおいては信仰の対象であったデーメーテルに諫めてもらおうとしていたのではないだろうか。

5 行目 呼びかけの相手として言及されるのは Γεραΐτι' ἄναξ である。ここではポセイドーンのことを指している。Γεραϊτός はエウボイアの地名であり、その南端に位置する岬のことでもある。*Od.*3.176 でも言及されており、ポセイドーンと関連がある地である。Γεραΐτια というポセイドーンを称える祭りがあったことがスコリアなどに見えることからそのことを窺うことができる^{*22}。Petraïn はこの詩ではポセイドーンの名誉回復を図っているのであり、ポセイドーンを安全や庇護の神として

*19 Petraïn, 2003, p.381, Gasser, 2015, S.106.

*20 Hunter, 2004, p.96.

*21 Petraïn, 2003, p.380, Fraser, vol.1, 1972, pp.198-200.

*22 Σ ad Pi. *O.*13.159.

扱っていると指摘している*23。

19AB と 20AB を一つの詩とみなすのは一見すると的を射ているように思われる*24。理由として挙げられているのは Lithika という石を題材としたセクションであるのにも関わらず 20AB にはそれに相当する語句がないというものである。しかしながら、必ずしもそのような石に関する言葉がなければいけないわけではないだろう。そのように考えるよりも 20AB という詩は Lithika というセクションとこれに続く Oionoskopika の橋渡しの役目を果たしているのではないだろうか。これは Petrain がすでに指摘していることであるが、注目すべきは、この詩がセクションの終わりに位置しているということである。その場合にその前までの詩の傾向とは異なり、それがセクションの終わりであることを示す特徴的な詩となることがある。この詩のあとに続く詩は海に関係する難破についての詩となっており、その橋渡しの役割をしているのが 20AB というわけである*25。そして、19AB では海で起こった出来事を扱っているのに対し、20AB では地震に関することがテーマとなっている。また、19AB と 20AB とではポセイドーンに帰せられている性格付けが異なっていることも考慮すべきであろう。19AB の方では巨人でも動かせないような岩をも動かしてしまうような力を持っているポセイドーン＝海の恐ろしい面が強調されている一方で、20AB では地震からプトレマイオス王朝を守護してもらうように祈願している詩となっている。これら二つの詩を一つのものともみなしてしまうよりは、むしろ対照的な詩として扱うことが適当であると思われる。そして、20AB にはテーマに沿うような石の文言は見られないものの、その代わりにポセイドーンへの祈願の詩とし締めくくってセクションの終わりの役目を

*23 Petrain, 2003, p.380.

*24 19AB と 20AB を一つの詩として考えているのは、Austin, 2002, p.42, Lapini, 2003, pp.42-44, Nisetich, 2005, p.52, Ferrari, 2008, p.100, Gasser, 2015, SS.110-111 である。

*25 Petrain, 2003, pp.381-382.

与えていると考えるのが妥当であろう。

Lithika セクション全体で見した場合、意図的に石の大きさに大小の差をつけている。比較的小さな宝石から始まり、19AB では突然大きな岩へとテーマが移行し、20AB では石というテーマからはずれてセクションとセクションの橋渡しの役割を果たす詩となっている。この『エピグラム集』自体がポセイディッポス自身の詩の配列そのままの状態であるかということは実証するのが難しいものの、その並びには作者かあるいは別の編集者であれその意図を見ることができるものとなっている。

参考文献

作家名、作品名、雑誌名の略記号はLSJに依拠する。

Acosta-Hughes, B., Kosmetatou, E., Baumbach, M. (eds.), *Labored in Papyrus Leaves: Perspectives on an Epigram Collection Attributed to Posidippus* (P.Mil.Vogl.VIII 309), Cambridge, Mass., 2004.

Austin, C., Bastianini, G. (eds.), *Posidippi Pellaei Quae Supersunt Omnia*, Milan, 2002.

BG = Bastianini, G., Gallazzi, C. (eds.), Austin, C. (collab.), *Posidippo di Pella: Epigrammi* (P.Mil.Vogl.VIII 309), Milano, 2001.

Ferrari, F., *Posidippus, Old and New: A Provisional Text with a Translation and a Commentary*, 2008 (https://www.academia.edu/8473948/Posidippus_A_Provisional_Edition_ms_).

Fraser, P.M., *Ptolemaic Alexandria*, Oxford, 3vols., 1972.

Gasser, A., 'Lithika (1-20)' in Seidensticker, Stähli, Wessels (hrsg.), 2015, SS.19-111.

Gow, A.S.F., *Theocritus*, Cambridge, 2nd ed., 2vols., 1952.

Hunter, R., Osservazioni sui Lithika di Posidippo, 2002, in Bastianini, G., Casanova A.(eds.), *Il papiro di Posidippo un anno dopo*, Firenze, pp.109-119.

———, Notes on the Lithika of Posidippus, 2004, in Acosta-Hughes, B., Kosmetatou, E., Baumbach, M. (eds.), *Labored in Papyrus Leaves: Perspectives on an Epigram Collection Attributed to Posidippus*

- pus*(P.Mil.Vogl.VIII 309), Cambridge, Mass., pp.94-104.
- Kuttner, A., Cabinet Fit for a Queen; The *Λιθικά* as Posidippus' Gem Museum, 2005, in Gutzwiller, K. (ed.), *The New Posidippus: A Hellenistic Poetry Book*, Oxford, pp.141-163.
- Lapini, W., Note posidippee, *ZPE* 143, 2003, pp.39-52.
- , *Capitoli su Posidippo*, Alessandria, 2007.
- LeVen, P.A., *The Many-Headed Muse: Tradition and Innovation in Late Classical Greek Lyric Poetry*, Cambridge, 2014.
- LSJ = Liddell, H., Scott, R., Jones, R.(eds.), *Greek -English Lexicon*, 9th ed., Oxford, 1940, with Supplement, 1996.
- Luppe, W., Zum *Λιθικά*-Epigramm Kol. III.28-41 Poseidipps (P.Mil.Vogl.VIII 309), *AC* 71, 2002, pp.135-136.
- Nisetich, F., The Poems of Posidippus, 2005, in Gutzwiller, K. (ed.), *The New Posidippus: A Hellenistic Poetry Book*, Oxford, pp.17-64.
- Petrain, D., Homer, Theocritus and the Milan Posidippus (P.Mil.Vogl.VIII 309, Col.III.28-41), *CJ* 98, no.4, 2003, pp.359-388.
- Seidensticker, B., Stähli, A., Wessels, A. (hrsg.), *Der Neue Poseidipp:Text-Übersetzung-Kommentar*, Darmstadt, 2015.
- Tsagalís, C., The Rock of Ajax: Posidippus 19.9 A-B, *Lexis* 31, 2013, pp.238-247.